



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

- P1 吉岡知哉学長インタビュー
 P2 私が受けた授業 P3 ゼミの活動紹介
 P4 修了報告書・修了論文あれこれ
 P5 学び あれこれ P6 清里清泉寮ゼミ合宿
 P7 サポートセンター活動 P8 立教を語る など

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」

編集責任：笠原清志 編集長：泉沢 勉

発行日：2011年1月15日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



吉岡知哉学長インタビュー「RSSCは知を総合化した場」



立教セカンドステージ大学(RSSC)は基礎固めを終え、充実の時を迎えようとしています。今後の運営について、RSSC学長を兼ねる吉岡知哉立教大学総長はどうお考えか、ニューズレター委員会の編集スタッフがインタビューしました。

☆

問 RSSCは他の生涯学習機関とひと味違うとの印象を持ちます。どのような特色がありますか。

学長 「大学」という名を冠しているとおおり、なによりも学問が総合化されている点が特色です。単発科目の寄せ集めではなく、カリキュラムにまとまりがあり、知の集約の場とも言えます。もう一点は50歳以上を入学の条件としていることです。学び直しを通じて、自分のこれまでの知識と経験を再統合し、それを社会貢献に役立ててほしいという願いがあります。

問 設立からほぼ3年、大学運営や開講科目などについて

どう評価していますか。

学長 受講生の評価も高く、概ね順調に推移していると言えます。ただ、現状に満足しているわけではありません。絶えず改革していく必要があると受け止めています。

問 どのような大学にしていきたいとお考えですか。

学長 社会のニーズに対応していくことが、何よりも大切です。その対応のひとつとして科目数を増やしてほしいという要望が多いことは承知しています。しかし、例えば全学共通カリキュラムの受講機会を増やそうとしても学部学生を含めた収容能力の問題もあります。

問 受講生を増やしていく計画ですか。

学長 増やした結果、受講生の質的レベルを落としてはいけない。受験者数から判断して、現状の規模が当面は適正でしょう。

問 RSSCの卒業生にはどのような点を期待していますか。

学長 これまでの社会経験を踏まえながら、学んだことをNPOやNGO活動をはじめ多方面で活用してほしい。キャリアを活かし、立教の学生たちの成長を助ける活動に関わっていくことも考えられますね。

私の受けた授業

RSSC選択科目は38科目。全学共通カリキュラム科目は153科目あります。今号では、いくつかの授業を選んで紹介します。

日本社会のジェンダー分析 (全学共通カリキュラム)

セクシュアリティに関わる問題解決に絶えずつきまとうジェンダーの現実には振り回されながら、学問として学ぶことをしてきていませんでした。



皆川満寿美先生の授業は、現代の日本社会における時事問題例えば労働の男性版・女性版、男女雇用機会均等法改正問題、女性のM字型労働の損失計算、少子高齢化、女性と企業裁判事例などを当事者の発言・資料を駆使しながら、ジェンダーの視点で分析し、これでもか、と解き明かしていきます。「さあ、みんなはどうする？ 答えはコメントペーパーへ」と言われ、その週のうちに課題について送信します。これが大変ですが、若い学生の感想・コメントと共に翌週には一覧にして配布されるので、読む楽しみという特典が得られます。

ジェンダーの解き明かしにより、若い学生たちのコメントには、迷いや苦しさの気持ちが正直に書かれています。少しばかり長生きした自分は、心から「がんばれ」と励ましたくなる面白い授業です。(T)

NPO/NGO・ボランティア活動入門



私は44年間のサラリーマン生活を終えてすぐRSSCに入学しました。

退職を機に自分の歩んできた人生を振り返った時、当然と言われればそれまで

ですが、これまでの生活は「会社と家庭」が中心でした。社会の問題については関心を持ちながらも、実際にはついつい傍観者になってしまったという反省がありました。自分のセカンドステージで少しでも社会に貢献したいと考え、この授業を選択しました。

授業では様々な地域や社会の課題に取り組むNPO団体などの紹介が佐野淳也先生からあり、実際に活動している人たちの貴重な体験談を聞かせていただいたり、現場を訪問したりしました。

「世界がもし100人の村だったら」という本を題材にして世界が抱える問題点を理解し、あるべき理想の村（世界）について受講生で話し合ったりもしました。授業を通じ特に女性や社会企業家として頑張る若い人たちの活躍を知ったことも強く印象に残っています。(M)

コミュニティデザイン入門 —自分を地域に活かす—

とにかく楽しい授業でした。森良先生のお人柄とファシリテーターとしての豊かな経験、さらには「聴く、質問する、つなぐ」という参加型学習方法の賜物だと思います。



授業内容は、「自分を地域に活かす」をターゲットに当て、それぞれの受講生が人生の棚卸しをしたうえで、居住する地域のニーズ探し、やりたいことを形にするマインドマップの作成、コミュニティのポスター作りまでの実践的演習が中核で、先生の効果的アドバイスの導かれていきました。

これから地域でNPOなどを立ち上げようと考えている人には、欠かせない授業です。私のように、これからコミュニティを学びたいと思う者にも体感的な理解ができました。

授業では、大学周辺にあるコミュニティ現場を見学したり、そこで活躍中の方々に教室に招いて話を伺ったり、あるいは受講生の構想に意見をいただいたりと、多彩かつ実践的な、印象に残る授業の日々でした。(N)

日本国憲法を学んで (全学共通カリキュラム)



せっかく大学で学ぶのなら若者と一緒に勉強したいという思いで全学共通カリキュラムの「日本国憲法」を選択しました。

憲法は日々の生活に深く関わっていて、私たちが毎日、平穏無事に暮らせるのは憲法があるおかげともいえるのに、これまできちんと勉強してこなかったことも受講理由のひとつでした。

授業は90分のうち、50分程度はDVDの紹介という構成でした。中でも印象に残ったのは、日本国憲法がアメリカに押し付けられたという見方がある中、政府やGHQ（連合国軍最高司令部）とは別に、国民主権に基づく新たな憲法を生み出そうと、民間人による民主的な憲法草案が作成されたことです。アメリカはこれを参考に両国間で熱い論議を重ね、日本国憲法が出来上がっていった様子がDVDで紹介されました。

立花隆先生の現代社会論の授業とリンクして、より理解を深めることができたように思います。あらためて「憲法」とは国民の権利を明確にし、為政者（国）の権力を制限するものであることを確信しました。(M)

ゼミの活動紹介

セカンドステージ大学には11のゼミナールがあり多彩な活動をしています。その中からユニークな活動、受講生と共有したい経験などをもとに選びました。

- ①日本の機どころ・桐生を訪ねる（古賀ゼミ）
- ②原子炉を目のあたりに（鈴木ゼミ）
- ③多様な性と生を考える（庄司ゼミ）

上記、3ゼミの活動内容を紹介します。

日本の機どころ・桐生を訪ねる

栃木県と境を接する群馬県桐生市は、古くから織物の産地として知られています。そこをこの目で見てみようという計画が実現し、丸山恵也先生の受講生と古賀（義弘）ゼミのメンバーの総勢18人が10月下旬、現地を訪れました。実地研究は、いかにも立教セカンドステージ大学らしい、持ち味をいかした企画と言えます。

桐生織は京都の西陣と並び称された日本の代表的な絹



見学者一同、昔から今に至る織機の歴史の分かる展示場で体験を楽しむ

織物で、奈良時代からの歴史があります。実際に目にした桐生の町は、昔日の勢いは失せたものの、面影をしのばせる施設が随所に見られました。織物関連のほかにも、江戸時代に創業した醸造蔵、からくり人形館をはじめ、明治、大正期の建物が立ち並んでいます。

最も勉強になったのは、古今の織機を陳列した織物参考館「紫（ゆかり）」の見学でした。桐生織物伝統工芸士から製品までの工程について詳細な説明を受けた後、昔ながらの機織機での体験も楽しみました。天然染色研究所では「草木染めの数は500もある」といった興味ある説明に耳を傾けるなど充実した一日でした。

原子炉を目のあたりに



原子炉を見ることはめったにない経験。鈴木先生の説明に熱心に耳を傾けた

ゼミの担当教員である鈴木先生が長らく所長をしていた関係で、神奈川県横須賀市にある立教大学の研究用原子炉を見学しました。

この原子炉は出力100^{キロワット}の研究用原子炉で、大学が所有する日本でも珍しいものです。1961年に運転を開始し、2001年に運転を終了。現在は使用燃料を米国に返却して

廃炉解体の準備を進めている状態だそうです。

研究棟の会議室で原子炉の概略について説明を聞いた後、放射線のポケット線量計を付けて原子炉棟へ。初めに制御室での減速棒の操作で出力を制御する装置は最低1^{メガワット}から最大100^{キロワット}まで目盛りが切っていました。原子炉で^{メガワット}単位の出力制御ができるなんてびっくり。単3電池に相当する出力です。原子炉を厚さ2^{メートル}以上のコンクリートで囲んだ原子炉は八角形で、思ったよりコンパクト。

いくつかの試料挿入口があり、核分裂反応で発生する熱中性子を使い、いろいろな物質の微量な化学組成を測定する放射化分析などの実験をしていたそうです。

室内の計数管のカウントは外とほとんど変わらずバックグランドレベル、ハンドフットクロスモニターで手足と衣類の汚染の有無を確認して見学は終了。ポケット線量計で測った被爆量もゼロでした。

“多様な性と生”を考える

「統計上の自殺原因の指標は、セクシュアルマイノリティの人々が悩み苦しんで自殺へ追い込まれた実態を見えなくしている」という当ゼミ生であるAさんの言葉を聞いた時に、私たち庄司ゼミのメンバーは、このテーマに強く関心を持つようになりました。

Aさんは職業上、セクシュアルマイノリティの人々と関わりを持ち、今も彼らの相談を受け止め続けています。庄司先生の授業でも一部紹介がありましたが、私たちの多くは「性同一障害」や「同性愛」という言葉を知っていても、その内実をきちんと理解していないことから、Aさんは具体的な事例で説明してくれました。

Aさんの教え子である当事者のBさんとCさんをゼミに迎えて話を聞くこともできました。私たちの素朴な質



授業では時折ゲストを迎え、自分の認識を揺さぶられながら学びを深めた

問から疑問が深まり、人間の性は複雑かつ多様であり、セクシュアルマイノリティの人々も対等で平等な存在であることを理解することができました。

Aさんは「性別違和感や性的指向の悩みを幼少から抱き続け、苦しみ、自殺したり自傷を繰り返す多くの人々がいるにもかかわらず、いる人間を“いない”ものとする社会」のありようを問いかけ続けています。私たちも、Aさんの仲間として新たな生き方の視点を持とうとしています。

修了報告書・修了論文あれこれ

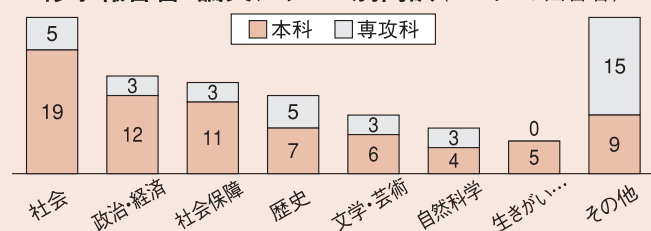
RSSCでは、本科生には修了報告書(12,000字以上)、専攻科生には修了論文(16,000字以上)の提出を課しています。受講生にとっては楽しくもあり、つらい課題でもあります。今号では、ゼミ担当教授のコメントをはじめアンケートを実施しテーマ、ジャンルや意気込みなどをまとめてみました。

アンケート結果から

今年度の受講生がどのようなジャンルの修了報告書・論文に取り組んでいるかは大いに興味があります。

アンケートによれば、選んだジャンルは社会、政治・経済、社会保障が目立ちました。現在の世の中の動きに関心を持ち、自分の考えとしてまとめたいとの意欲の表われと見ることもできるでしょう。歴史や文学・芸術、環境やNPOなど市民活動をテーマにした人もあり、幅広い問題意識や豊かな感性がうかがわれます。専攻科生の論文では、4人のうち3人が新しいテーマに挑戦し、他の方は修了報告書と関連した内容を探り上げ、深化させていることがわかりました。

修了報告書・論文ジャンル別内訳(アンケート回答者)



平成22年11月1日現在の在籍者は専攻科58人、本科85人で計143人です。アンケート協力者は、110人ですので回収率は約77%となります。

私のテーマ

無縁社会を考える



人間関係が希薄になってきていることを最近強く感じています。誰とも交わらず、誰でもひとりで生きていくことが簡単な時代。ひとりであることに居心地のよさを感じている人も多くいます。

他人に興味を持たない社会。このような社会での人間関係は成り立たず、つながりのない無機質な社会、『無縁社会』です。日本の社会の中でもっとも重視されてきた「地縁」や「血縁」に対する意識も薄く、退職すれば「社縁」も薄くなります。

私たちは普通の生活をしていても、いつのまにかつながりを失い、家族との絆もなくなり、まったく社会とのつながりのない孤独な老年を迎えることになります。最近増えている高齢者の「無縁死」は近い将来、誰にでも起こりえることです。高齢者になって社会的に孤立しないためには、どのような人間関係や社会関係を構築していけば個人が最後まで輝いた人生を送れるか？それを修了報告書の研究テーマとして考えています。

(本科 佐々木京子)

ゼミ担当教員からひとこと

大学院21世紀社会デザイン研究科教授 庄司洋子



いよいよ追い込みの時期を迎え、いまはすべての受講生が報告書や論文を書く苦しみを“堪能”しておられることと思います。報告書・論文は、一定期間の専門研究を踏まえた卒業論文・修士論文とは異なります。あまり肩肘張らずに、この機会を逃せば生涯を通じて二度とないだろうという気概をもって、執筆に取り組んでほしいと願っています。

私たち教員はしばしば、自分のゼミ生が提出した報告書・論文の水準の高さに驚いたり、生活経験のなかからしか生まれない独自の内容と視点に感動して、それを交換、共有する喜びに浸ります。それは受講生のこれまでの人生の成果物にほかならないからです。

残された短い期間のなかでも、ぎりぎりまでの推敲を重ねることで書かれたものがいっそう輝くのだ、という信念をもって報告書・論文と向き合ってください。そしてやがて、自分で自分を褒めてあげたい、という日を迎えましょう。

受講生の意気込み

「団塊世代から若者へエールを送りたい」「現在の社会が抱えている病巣の解決の糸口が見つかればよいと思っている」―。受講生が報告書や論文を書くにあたっての意気込みは様々です。具体的なテーマをいくつか紹介しましょう。「ベトナム経済の展望」「日本の自然保護運動におけるナショナルトラストの活用についての考察」「地域社会における異文化共生」「ヒューマンエラー」等々、テーマは多岐にわたります。

私のテーマ

造船国日本のルーツを探る



富士山の眺望と砂嘴(さし)とで織りなす景観が素晴らしい伊豆半島西海岸の戸田港。この地が近代的な船づくり発祥の地のひとつであると知る人は少ない。

修了報告書では、以前から「幕末から明治初期」の世相に興味があり、ゼミの古賀義弘先生が造船産業の専門家であったことに加えて、住んでいるのが静岡県ということもあり、幕末期の洋式船づくりへの挑戦を戸田の人々も含めテーマとしました。

沿岸航行用の小型で1本マスト、風まかせの和船建造技術しか持たない当時の人々がいかに最新の洋式船建造に挑み、後年の造船国の礎を築いたか、その努力に感心しつつまとめました。現地調査を含め報告書作成過程で新たな興味も湧き、これが専攻科進学のも動機にもなり、修了論文では統編的な明治初期の造船起業家に取り組みました。

私にとって、先生の指導を受けながら、興味のあることをひとつの論文として形にすることは、この大学に学んだ証しともなり、貴重な得難い体験となりました。

(専攻科 酒井 広)

学び あれこれ

私たちはRSSCで、同じ世代の仲間と時間や場所を共有して学んでいます。ひとつ所に集うことが自他理解・新たな発見・学びの深化につながっています。

本科生の中には夫が1期生で、今年度は妻が3期生という人がいく人かいます。学び舎や思い出が共有できる、立教大学が夫婦の母校であるという人もいます。

母親の学ぶ姿をカメラで追いながら、母の学びの意味や親子の関係を問い続けた息子もいます。

共に学びあうことを、夫婦のつながりや親子関係という視点から眺めてみたいと思います。

***** 夫婦で学ぶ *****

いずれも夫が一期生だったIさん、Kさんの二人に話を伺いました。

問 夫と同様にRSSCで学ぼうと思った理由は？

I お互いに知的欲求が強かったからです。夫は聖書と英語、私は聖書と芸術全般に興味があって、是非学びたいと思っていました。

K 学生生活をエンジョイしている夫にとっても刺激を受けました。私も学んでみたいと思っていたところに夫も奨めてくれました。

問 入学後の日常生活や、夫婦の間で変わったことは？

I 夫がカリキュラムを理解しているので、資料情報の収集でアドバイスをもらえます。夫婦で共通の本や教材を読むようになりました。

K 同じ学びの経験から会話が增え、共通の友人の輪が広がりました。「男子厨房に入らず」の夫が私の不在時には料理を楽しむようになりました。

問 卒業後ご主人は、何をしていますか？

I 現在は東京都内の大学院に進学し、一層レベルアップを図っています。目が悪くなる前に、本を徹底的に読みたいと言っています。

K 埼玉県新座市にある平林寺で歴史や文化、自然などを説明するボランティア活動を精力的に行っています。

夫婦に共通の学びの体験があると会話が弾み、相互理解が深まるようです。学びの姿勢が一致しているため、相手の意志や希望を尊重しあえる関係になったことがうかがわれました。息子が制作した番組は、母の学びが親

***** 見つけた忘れ物 *****

佐野ゼミ 専攻科 中田 透

サラリーマンとして悔いのない生活を過ごしていると思っていた私は50歳代半ばごろから人生に何か忘れ物をしているのではないかという気がしてきました。母を亡くした時期と重なります。



60歳を迎えるにあたり、定年を延長せず一度立ち止まって自分を考え直してみたいと思うようになっていました。妻からは、「趣味は違うし、仕事人間のあなたとでは会話が成り立たない」といつも言われていました。

そうしたとき、私たち夫婦の母校でセカンドステージ大学を立ち上げたことを知り、2009年に入学しました。

入学後は授業やフィールドワークで学んだ知識をもとに夫婦で様々なことを語り合うことが多くなりました。ゼミや、研究会の仲間との交流も楽しく、忘れ物を見つけたような気がしています。

***** 息子からみた学ぶ母 *****

先ごろ、立教セカンドステージ大学に通っている母を息子の私の視点から、追いかけてみたいと思い、NHKドキュメント20min.「母が突然、女子大生になった!？」を制作しました。

取材の途中で、私はこれまで見たこともない母を発見しました。それは、母ではなく、一人の女性としての顔でした。

同じ世代間の問題意識を共有し、学び、話ができる「同士・仲間」を得たことが、母にとって大きな喜びのように見えました。母は決して変わったのではなく、青春時代を取り戻したのかも知れません。

息子として、そうした母の姿を見るのはやはりうれしいものです。(翔)

◆ 翔さんは、本科生Mさんの二男で20代の若者。テレビ局で番組の制作をしています。RSSCで学び始めた母親が日に日に変わっていく姿に驚きを覚えたよう



うです。自分の知っている母が、母でなくなるような不安と、理解しがたい戸惑いがあったと語っていました。

授業やゼミ合宿などに同行し、取材を続けた中での率直なコメントをいただきました。(編集委)

子の新たな関係を紡ぎ出し、心温かなものになっています。人との輪の広がりは、学びに深みを与え、彩を添えます。「学び直し」は、身近な人たちとの関係性の構築にも寄与することを再認識させられた企画でした。

9月10日～12日恒例のゼミ合同合宿が、受講生64名、教職員12名の参加で、清里の「清泉寮」で行われました。今年度は、「キャンプファイヤー＆フォークダンス」というこれまでにはない企画で盛り上がり、「人と人、人と自然のつながりを実感できた」という感想に集約される素晴らしい体験をしました。

文芸講演会

講師は千石英世先生で、シモーヌ・ヴェーユの美を中心にした話でした。先生は彼女の主著「重力と恩寵」の内容を引用し「美とは、偶然と善とのおりなす諧調である。美しいものは必然的なものである。それは、それ自体の法則に、ただその法則だけにかなうものであろうとして、しかも善に従っている」と、ヴェーユ哲学の真髓を解説しました。難解ながら、新鮮な思いを抱いた講演でした。



自然保護観察・聖アンデレ教会

2日目は、清泉寮周辺の自然を、若い男女のガイドで探索しました。笹の葉で「笹」や「鉛」を作ったり、落ち葉集めのゲームなど、都会生活ではあまり経験できない遊びに興じました。状況に合わせて、童心にも戻れるRSSCの仲間の柔軟さは素敵です。

次に訪れた畳敷きの礼拝堂「聖アンデレ教会」は、開拓当時から人々の心の拠り所だったことが実感できるような安堵感があります。当時に思いを馳せ、静かに祈りを捧げました。

現代美術館巡り

ここは、館長さんと弟さんのお二人のこだわりや、思いが詰まった個性的な美術館でした。ボイスをはじめ、ライナー、ジョン・ケージらの、世界的な作家の作品のほか、音の常設展示もあります。「分らないのは、見慣れないからです。この世に分ることなど何もない、どこまで分っているかだけが大事なのです」との解説は、哲学的でもありました。作品と対峙しながら、変化を恐れずに生きていけるかと自問自答していました。

野辺山周辺バスツアー

天候に恵まれた野辺山高原平沢峠から見えた初秋の赤岳等の山並みは、最高の景観でした。この峠は、標高1350m。周囲が山に囲まれた平坦な地形で、観測には最適の場所です。野辺山の星座が見られるプラネタリウムでは、天空に広がる満天の星を眺めながら小惑星イトカワに思いを馳せた人もいたのでは…。



アンケートの結果です！

清里清泉寮ゼミ合宿

* 楽しい交流体験を、更なる学びへの意欲に！

- コミュニティづくりとして意義あるプログラムだった
- 時間を厳守・皆が協力を実行、受講生のレベルの高さを再認識した
- この年代で、寝食を共にするという不思議な時間と空間を楽しめた
- 入学の目的のひとつ「いろいろな分野で活躍してきた人たちと議論し、酒を交わす」という願いが叶えられた
- 木星を見るという星空観察会は素晴らしかった。最初で最後の経験だろう
- 「未来志向でいこう！」で意見が一致し、大きな励みになった



* キャンプファイヤーは、最高の思い出になった！

- 青春時代にタイムスリップした感じで楽しかった。皆、生き生きしていた
- 楽しかった、青春が蘇る思いだった
- フォークダンスで、みんな高校時代を思い出したのでは…

今回のゼミ合宿では参加者を対象にした初のアンケートを実施しました。感想の一部を紹介します。

全体的には、天候にも恵まれ、イベントも含め満足できたという声が多く寄せられました。

* 仲間意識が強まった！

- 初めて出会って話す人の多さに我ながら驚いた
- 他のゼミの人と交流できて良かった
- 後期の授業が楽しくなった
- 学生生活にも慣れ、講義内容や世間話など、話題は尽きなかった

サポートセンター活動

在校生や修了生の社会との関わり合いや社会貢献活動を支援するため、大学がサポートセンターを設置しています。そこで現在活動中の13のサポートセンターの活動状況を順次紹介していきます。

アジアの貧困問題に取り組む

アジアの貧困とNPO／NGO支援研究会の目的は、アジアの貧困問題を調査・研究し、問題解決の一翼を担うことにあります。将来は、各研究機関や教育機関と共同で活動しようという構想を持っています。



手始めに、アジア諸地域の現状についての基礎知識を得るため月1回、勉強会を開いて各種の文献を読み進めています。リポートもいくつかまとめました。

実施調査の面では昨年、メンバーの一人がバングラデ

シュの主として障害者施設を訪問し、今年は4人が、グラミン銀行、BRAC（バングラデシュ農村向上委員会）のマイクロファイナンス、大学、小学校、スラムの実情を視察しました。

先般のホームカミングデーでは多くの受講生・修了生の多大な協力を得て、RSSCホームカミングデー委員会・ウィメンズクラブとの共催でバザーを出店、売上金をバングラデシュの施設に寄付をしました。

メンバーは現在、1期生から3期生までの計13人（男6・女7）です。多くの皆さんの参加を歓迎します。今後は、他のアジア諸国・地域の調査・研究も深めていきたいと考えています。

（アジアの貧困とNPO／NGO支援研究会 K）

バングラデシュ訪問記

首都ダッカでは驚きの連続でした。約1億6千万の人々が北海道より少し大きい面積に住んでいますから、街は人であふれ、車とリキシャの洪水です。他の南アジア諸国と比べてもその喧騒と砂埃は別格で、街にはエネルギーを肌で感じます。

今回の目的は世界最大のNGOであるBRAC大学とグラミン銀行グループの貧困脱却の取り組み状況の視察でした。BRACではアベッド総裁夫人（BRAC大学語学校長）や幹部からの出迎えを受け、BRACへの理解を深めました。既婚女性向けマイクロファイナンスの様子は、現場に出向き詳細な実態を把握しました。貧困

から抜け出すためには教育が最優先と、まず婦女子から始めています。

その後、BRACが最貧層の優秀な子供たちに非公式初等教育を行っているバラック小屋の小学校を訪問、交流しました。バングラデシュの子供たち（写真）に笑顔で迎えられ、皆さんとても可愛く人懐っこく、手を繋ぎながらスラム街を歩きました。グラミングループでは新設した看護師養成の大学を訪問、ウダ博士から説明を受けました。国内での看護師不足の解消にとどまらず、海外にも派遣して外貨獲得も模索している遠大な計画です。（I）



ワインを楽しむ、文化を語る

ワイン文化研究会は、セカンドステージを豊かに過ごすためにワインを賞味しながらフランスを中心にヨーロッパの文化を語り合い、「ヨーロッパの風と香り」を発信することを目的としています。



今年の4月から隔月、セントポールズ会館で、銘醸ワインと料理を味わう会を開催しています。代表はボルドー第二大学醸造学部留学をされた二期生の金子三郎さん。毎回、講師としてフランスの歴史や文化を講義し、

ご自身がセレクトした銘醸ワイン、例えばシカゴのオークションで落札した入手困難な逸品や伝統的なシャトーの特級ワインなどを織り交ぜながら、みんなで至福の時間を共有しています。7月はパリ祭、12月はクリスマスパーティー。毎回25名程度で締め切られるワイン会は大盛況で、心ならずも人数制限をしなければならないほどです。

当初1期、2期生の計60人という会員数で発足しましたが、3期生の方から入会希望も多く、この10月から13人の3期生が加わり総勢70有余人の大所帯となりました。

ワインは文化！立教セカンドステージ大学から〈ヨーロッパの風と香り〉に乾杯！（ワイン文化研究会T）

同窓会は多彩な催し

RSSC同窓会は、発足から2年が経過。会員数は189人。各種同好会を含めて多彩な活動を展開しています。例えば「多摩川クリーン作戦」と称して清掃をしたり、ゲゲゲの鬼太郎のロケ地や地域の名刹を散策したこともあります。「古典落語に親しむ夕べ」も企画。

同窓会は大学で学んだ仲間が、卒業後も親睦・交流を楽しむ場です。この大学での学びはゼミや授業に恵まれ、学生らは充実した時間を共有してきました。同窓会はその延長線上にあります。様々なバックグラウンドを持ち、人格的にも優れた人々の意見や考え方は、授業のおもしろさとは別の興味深いものがあります。活動内容を一層充実させていくつもりです。（F）

立教を語る

*** リベラルな学府の伝統受け継ぐ ***

小さく生まれ、大きく育ったというのが今日の立教の姿でしょう。経営母体は立教学院。小学校から大学院までの一貫教育体制を持ち、とりわけこの10数年の大学を中心とした発展は目覚ましく、学部数は10と倍増、学科は27を数えます。文科系を中心とした堂々たる総合大学としての陣容を整えました。

1990年には埼玉県新座市に新キャンパスを開設したのに続き、時代のニーズに対応、先取りした観光、コミュニティ福祉、異文化コミュニケーションの各学部を相次ぎ設置。理工系で唯一の理学部は50年の歴史を持ちます。すべての学生が受講できる共通のカリキュラムも設け、多様性を持つ人材の育成にも熱心に取り組んでいます。3年前には、生涯学習機関としての立教セカンドステージ大学も設立しました。

ツタの絡まる煉瓦造りと近代的な構えを織り交ぜた校

舎群は、立教の古い伝統と時代を先取りした教育機関を象徴するものです。実際、学校内に足を踏み入



れると、キリスト教系にふさわしく、由緒あるたたずまいのチャペルなどが立ち並んでいます。学生の学習や課外活動を支援するために最新設備を備えたメディアセンターやボランティアセンターも設けています。

「立教」の名前の由来は諸説ありますが、そのひとつに極を立てる人というのがあります。極とは原理を意味しますが、この常に本質に迫ろうとする自由な精神こそが1874年の創設時からの立教のバックボーンです。リベラルアーツは建学以来、今日まで脈々と引き継がれてきました。言葉を換えれば、立教は確固とした指導理念を持った教育機関と言えるでしょう。

ホームカミングデー

今年で48回目。「セカンドステージの生き方—RSSCの教えと学び」の特別企画があり、先生方からお話をいただきました。



千石英世先生 「例えば、ゴヤのファーストネームは、という疑問を解くために文献を探す。そのために、身体をまず動かす。それが学びの第一歩です。RSSCの学びは、まさに“学ぶことは身体的なこと”の具現化です」

庄司洋子先生 「RSSCのこの場こそ、真の男女共学です。立教の異世代共学は、若い学生への影響も大きく、大学のあり方に一石を投じています」

笠原清志先生 「RSSCは、シニア世代の新しい学び

のモデルとして成功しています。日本の“チェンジ・エージェント”になって欲しいものです。」

4人の本科生からは、学びの深遠・人とつながれる喜び・自己変革・興味の広がりなどの感想や、率直な意見や要望も出され、笑いあいの和やかな催しとなりました。

今年度初めてのバザー出店（「RSSCホームカミングデー委員会」「ウイメンズクラブ」「アジアの貧困とNPO/NGO支援研究会」の共催）も好評でした。

これは、「ほんの少しでも社会に役立つ活動」の一環として売上金は日本・アジアの貧困等に役立てる寄付を目的としたものです。当日は、大盛況のうちに完売し、RSSCのパワーを実感できた1日となりました。

クリスマスパーティー

昨年12月、太刀川記念館でクリスマスパーティーを開きました。実行委員18人のメンバーは事前に何回も話し合い、計画を練りました。「全員参加で楽しんでもらう」を合言葉に、知恵を絞りました。

ゼミの先生方の協力を得て、クイズもつくりました。内容はなかなか面白く、当日の参加者全員が参加したほか、各自が持ち寄ったプレゼントを交換、私たちが期待した以上の盛り上がりを見せました。大合唱となったクリスマスソングは圧巻でした。

パーティーには金大原チャプレンがクリスマスと食前の祈りを捧げ、いかにも立教らしい雰囲気でした。



有形無形のプレゼントをもらい、楽しい時間を共有できた夕べでした。

編集後記

ニューズレター発行も今回で6号を数えます。今号は吉岡学長とのインタビューをはじめいくつかの新しい試みをしました。16人の編集担当者が苦闘しながらも発行にこぎつけられたのは、不慣れた作業をむしろ楽しんで熱心に取り組んだこと、諸先輩が残したノウハウを活用できたこと、などに負うところが大きかったと思っています。編集担当一同、いい思い出になりました。(I)